令和６年度　青梅市立新町中学校　学校評価シート　　Ｒ７．３．５

＜学校経営方針の重点＞　自分と人類の幸福創造する人材の育成の視点（Agency 教育【OECD　LearningCompass2030】）に立って新町中教育目標に迫る。
１　進んで学ぼう　　２　美しい心を育てよう　　３　たくましい体をつくろう（未来を拓こう）

●評価基準　　９０%以上達成A、　７０%以上達成B、　５０%以上達成C、　５０%未満Dとする。
●自己評価方法　　※保護者及び生徒アンケートも加味し、評価する。（教員５０%、保護者２５%、生徒２５%）

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価%	分析結果	改善策	学校関係者　評価記入欄 評価	学校関係者　評価記入欄 コメント	学校の見解と今後の方向性
進んで学ぼう	Agency 教育に基づく**自立を目指す主体**的・対話的で深い学びの実現	【学習指導力の向上】授業改善でなく授業改革を進める。**自立を目指す学び、教師主導でなく生徒が切り拓く授業を20%以上**	①青梅市校内研究指定校**発表年度**としての研究を推進し、教科部会・学年会・管理職授業観察等での協議を深め、研究主題「Agency・AAR サイクルをもとにした**自立を目指す主体**的・対話的で深い学びの授業追究～OECD 学びの羅針盤2030 の提唱より～」を実現**・発表**する。	B 75.0	10／25 に研究発表を滞りなく行い、公開することができた。ＡＡＲサイクルのＡ１【見通し】では、課題が多く未解決な部分がある。また、そもそも１単位時間の中でＡＡＲサイクルを回す困難さもある。これらの課題解決を行ってＡｇｅｎｃｙ教育を推進してく必要がある。	Ａ１【見通し】の諸課題は、「学びの選択」に集約する方向で検討を重ねる。ＡＡＲサイクルは小単元等、まとまりのある中で柔軟に回していく必要があるが、いずれにしても教師主導でなく生徒が主体・解決していく授業を引き続き目指す。	B	・Agency の理念に基づく教育方法と考えると、教員と生徒の二面性がある。教師の分析はなされている。生徒アンケートからも「主体的な学習や対話的な学習」で約９０%が肯定的である。 **・生徒が主体の授業、自立を目指す教育については年々浸透しつつあると思う。** **・数学習熟度別で3段階のクラス分けなど生徒が勉強に取り組む姿勢が違っていい。** ・全ての教科に「進んで学ぼう」というのは難しい。課題によっては半日かけるとか、好きなものに特化してみるとか、従来の押し込みと併用が必要ではないか。 **・教師と生徒の会話が授業で取れているが、深い学習はまだ課題がある。**	Agency・ＡＡＲサイクルを生かした授業は道半ばであるが、一定の評価をいただいた。今後も生徒自らが意欲的に学習に取り組む姿を目指すことが生徒 Agency を育てていると捉え、このための授業への工夫・改革をたゆまなく続けていく。特に意欲を引き出すポイントとなる生徒の「学びの選択・設定」や教師 Agency を働かせ、教師が Generator となり、理想とする解・価値観を生徒と共に生み出す工夫を重ねていく。
			②ICT の活用：電子黒板、タブレットパソコン等の使用の日常化を図る。（受験５教科は週２回以上、実技教科週１回以上）	B 80.0	おおむね達成できている。ＩＣＴ機器使用の目的は生徒の知識や思考等を高めるツールであることを再確認する必要がある。	ＩＣＴ使用率の一定規模を維持した上で、生徒の学力向上を高めるための使用例を研修し、利活用できる資質・能力を高めていく。	B	・パソコン、電子黒板を活用した授業で ITC 機器の有効活用は出来ていると評価した。 ・ICT 機器の活用は、教師は研修によって、資質・能力の向上を図る事の重要性を認識していることが素晴らしい。生徒においても、苦手意識が ICT 機器の日々の利活用によって、払拭されている。 **・タブレット等の使用授業に生徒達も慣れてきていると思う。そのまま進めていただきたい。** ・ＩＣＴの活用は機器に慣れやすい年代には受け入れがすんなりできるように見えた。	具体的な方策に基づいて、ICT の利活用が浸透してきていると内外共に評価を得た。。ICT はに日進月歩であるので、今後も教師の研修会や OJT を定期的に行い、ICT の利活用を進められる指導力を更新していく。
			③自立的家庭学習を生徒に課し、受験５教科で、毎授業ごとに授業ノートまとめ**・演習等**を行わせ、**授業で何を学んだのかを俯瞰させる。**	C 67.5	生徒の思考力等を高めるために、ノートまとめ等を２年間継続して生きたが、３者共に課題意識をもっている。特に保護者からの評価は低く、根本的にあり方の再定義が必要である。	生徒にとっては取り組みやすい方法の掲示、保護者にとっては具体的に後押しのできる対応、教員にとっては持続可能な方法が必要である。また小学校との連携も視野に入れる。	C	・当日、受講した授業を整理するためにも、授業ノートまとめは必要である。整理した上で、振り返りを行い理解できなかった項目については、ネット等で調べて当日中に理解する。この繰り返しを毎日行えば、実力はかなり向上する。 ・家庭学習の範疇は、宿題や予習復習への学習活動である。これに加えて、**生徒の成長を促すには学校（教師）・生徒（本人）・保護者の三者の共同作業によってなされる必要がある。**しかし、生徒は成績で評価されることへの反発はあると思う。 **・家庭学習を定着させるのは難しいと思う。保護者の協力が必要である。** **・理解度と家庭の関心がテーマと思われるが、タブレット等のICT機器を利用してはどうか。**	学校関係者評価からも生徒・保護者・教師との三位一体についての指摘があった。双方が取組易くできる仕組みづくりが焦眉の急であると判断する。これまでのやり方を改め、新しい方法を提案していく。その際に学習時間管理ができる仕組みづくりに着手する。また次年度は学習ソフト【ミライシード】が青梅市立小・中学校に導入される予定なので活用を図る。
			④数学の学力向上への取組：3段階の習熟度別クラス編成授業、朝学習週1回以上、1・2 年定期考査数学結果を踏まえた課題解決シートに基づく生徒実践、1 年学力調査の実施等	B 70.0	本校の積年の課題である数学の学力向上策の一環として、今年度初めて創設したが、取組としてはおおむね妥当である。今後は成果を出していくことが求められる。	次年度以降も継続して、結果を出していく必要がある。	B	・令和６年度全国学力・学習状況調査結果で東京都平均より国語、数学に課題がある。具体的にできない問題の分野をもう少し深く分析して、そこにターゲットを絞り、底上げする工夫が必要である。 **・数学の学力向上への取組としての新たな習熟度別のクラス編成（3段階）については、継続していただきたい。** ・今年度の取組を次年度以降も継続していただきたい。 ・やる子とやらない子の差が出てきているのではないかと懸念する。 ・数学の学力向上は多種の要因があり弱いところからアプローチしていく必要あり。	学校関係者評価から今年度の取組について概ね支持された。次年度も継続し、数学の学力向上に努める。
美しい心を育てよう	Agency 教育に基づき VUCA&Diversity&&Inclusion 時代に生きる力を育成する。		⑤Agency を引き出す校則の見直しを**ルーチン化し、現行及び未来の校則に関心をもたせるとともに生徒の参画意欲を引き出す。（第Ⅲ期）**	B 77.5	今年度から校則の点検・見直しについてルーチン化することができた。今年度は夏期のジャージ登校期間の見直し・延長が、生徒会で提起され、生徒総会の議決により更に校則の改善が進んだ。課題は生徒の関心は高いが、ルールが守られていない実態があり、生徒が当事者として意識・行動が弱い。	教員も生徒もこれまでの改定経緯や改定方法について深く共通理解し、お互いが相手の立場を尊重して議論を進めていくことを前提にしてきた。校則は生徒の参画・力で変えられるという、これまでの閉そく感を打開するとともに、遵法精神の育成についても生徒の力を引き出しながら実現を図りたい。	B	・生徒参画による校則の点検・見直しで服装等の改定が実行段階に入ったことは評価でき、今後に期待できる。 ・Agensy の理念による校則の見直しでは、校則を守られない生徒への継続した対応が必要である。改善策にある、深い相互理解と他の者を尊重する思いやる心の醸成が必要と捉える。 **・生徒自らが考え見直した校則、常に点検、見直しは必要で、自分たちで決めたルールを自分たちで守る早く習慣になってくれると有難い。** ・規則の徹底と見直しは大事。標準服の変更もよいが、金銭的な保護者負担に配慮した変更が望ましい。	取組について一定の評価を得た。これまでの取組を継続するとともに、遵法精神を高める工夫を生徒とともに考えて、生徒自ら力によって向上できるよう努めていく。

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価 %	分析結果	改善策	学校関係者　評価記入欄		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
（続き）美しい心を育てよう	（続き） Agency 教育に基づき VUCA&Diversity&&Inclusion 時代に生きる力を育成する。		⑥いじめ・暴力・自死ゼロを目指し、命や環境の大切さを実感する教育を推進する。（ボランティア活動、セーフティ教室、生徒会いじめゼロ運動、**いじめ防止**等をテーマにした道徳授業地区公開講座、**1･2 年**修復的対話講習会等の実施）	B 77.5	予防・発達支持的生徒指導の取組は計画通りできた。しかし、いじめや暴力が発生している事実がある。特にスマートフォン・ＳＮＳを介したトラブルが顕著であり、学年を問わず課題がある。古典的ないじめである悪口、落書き等による誹謗・中傷等もある。	・情報モラル教育を１・２年セーフティ教室で継続実施するとともに例月安全指導でも継続的に指導を行う。 ・青梅警察署との連携強化 ＳＮＳによるいじめが発生した場合は適切に連携する。またこのことを生徒に予告する。 ・ＳＮＳ東京ルールを基にした家庭ルールの策定・遵守の推進	B	・いじめ・暴力・自死ゼロに向けて「情報モラル教育」、「セーフティ教室」を継続的に実施するしかないと思う。 ・心配事があればすぐに先生に相談できる環境作りもお願いする。 ・積極的なボランティア活動を期待してる。 ・いじめや暴力は、他者を人間としての生命の尊厳を認識し、その解決に向けては粘り強い会話・対話による相互理解が図られる場や機会を多く設定していくことが必要である。 ・社会に出てもいじめはある。被害を受けている子に寄り添い一緒に考えながら解決できたら良い。 ・危険性が理解できていないと思う。自分が加害者になるかもしれないという危機感を持たせる。 ・ＳＮＳの危険性について学校が指導しても、今もＳＮＳを使っていじめが多く行われている。されたこのケアも大事だが、どうしていけないかを生徒に議論させなど、指導の充実が必要である。 **・いじめ等も規則に取り入れてはどうか。グループ化させない、リーダーへの教育等が必要となってきている。**	学校関係者評価の意見を踏まえて、いじめ防止対策推進法に基づく「生徒はいじめをしてはならない」や人権尊重に基づき相手を否定した言葉の発信（ＳＮＳ含む）を禁止する内容を盛り込む校則の改定について生徒と共に検討していく。いじめがいけないことを考える場は道徳の授業や生徒会企画の道徳で行ってきているが、これらを一層充実させていく。特にＳＮＳ関係・情報モラル教育については家庭や警察と連携した取組も行う。
			⑦長期欠席生徒に年間シートに基づく支援体制を構築する。１週間１回の家庭訪問、リモート授業、別室支援等を行う。**他機関との連携も強化し、支援を継続する。**不登校担当教員と連携・シェアを図る。	B 80.0	教員と生徒・保護者の設問に若干差異のある内容であるが、取組（努力）指標としての行動は、ほぼ妥当と判断される。しかし、不登校生徒は２０名を超えており、特に９０日以上を超える生徒には、学習支援等が不十分な状態にある。	努力指標・行動では、ほぼ限界に達してきている。従って、現状の対応を継続せざるを得ない。しかし、これでは課題解決にならず、行政の支援が望まれる。具体的にはＳＳＷの配置やメタバース登校の認定を行政当局に求めていく。ただし、メタバースは教員不在の中での交流となり管理上の課題がある。	B	・本人の問題や家庭等の事情もあり不登校生徒に対する支援は課題がある。不登校になった要因が少しでもわかれば対応策を考えることができるが、本人やその家族と面会できないケースは手の打ちようがない。 ・小学校から継続している生徒もいるので小学校とも定期的な情報交換が必要である。長期欠席者や不登校の課題は、長年に検討されているが、決定的な改善策はないのが現状である。分析結果のように不十分ではあるが、一定の成果もある。改善策にあるように現状の対応の継続と SSW の有効的な配置により、改善が見込まれる。 ・不登校に関しては、正しい対応（正解）というものがない。個々の生徒に合った対応が必要。先生方も大変だとは思うが、SC、保護者、民生委員等と連携して対応を継続していく必要がある。 **・教員によって対応の違いが大きい場合ある。復帰させるための専門チームを形成するとよい。**	学校欠席が９０日を超える当該生徒は、学校復帰が難しくなる傾向にあるので、不登校になりかけた時の初期対応・支援を充実させ、長期化しないよう保護者と共に連携を図る。その戦略・計画については既存の組織である校内委員会（管理職、養護教諭、ＳＣ、各学年担当教員等）を充実させ個に応じた対応を強化する。
			⑧生徒の不安や期待を受け止め支援したり、生活指導等において生徒の意見表明権を保障したりする場面を日常化する。	B 82.5	本項目は、教員・保護者と生徒との間で乖離が見られる。（10ポイント）生徒の方が、満足度が高い。しかし、教員・保護者はそれより不足と感じている。	生徒の肯定的な受け止め方に満足することなく、引き続き丁寧に寄り添い指導・支援を行う。生徒への意見表明権の保証を確実に行う。	B	・生徒の意見を尊重し、生徒が先生に気軽に相談できる先生と生徒との環境作りが大切である。 ・生徒の不安や期待に対する対応は、改善策にある通り Agensy の考え方に則った対応策を教師・保護者・生徒の三者によるコミュニケーションを図る場や機会を継続して提供していくことが有効ではないか。 ・やはり先生の力が必要、生徒に寄り添い、一緒に考えるのが良い。 ・目安箱を設置したり、ＳＮＳ等で吸い上げたりすることも必要である。	ＳＮＳ等の吸い上げは、月例のいじめアンケートで生徒の不安等を受け止める項目があり、４・５・１０・１月で実現できている。これに基づいて教師が迅速に対応している。生徒が先生に気軽に相談できる体制については、今後も意図的に充実させていく。
たくましい体つくろう（未来を拓こう）		自分と皆の幸福を創造する。	⑨青梅学を通して理想とする青梅を探究することにより幸福な日本・世界を創造する。	B 80.0	生徒の肯定的な評価は 87.5％でＡ評価に迫る勢いである。一方、教員・保護者は 77.5％で差が大きい。	教員がまず 3 年間行う青梅学での認識を深める。また、他地域との比較を通して青梅を多面的に捉えさせる。その上で保護者・地域の方に発信していく。	B	・多摩川の上流域で東京都の中では自然が豊かな青梅市。まずは自分が住む青梅市の良いところを理解し日本、世界にはばたく新町中学生になることを期待している。 ・青梅学の考え方は、良い。郷土に対する興味・関心を持つことで地域の方々へ目を向ける機会となると考える。その中で次の次元の人類という範疇まで広げられているので素晴らしい。今後の進め方に大きな期待を寄せている。 ・青梅学、新町学、伝統文化を伝えてほしい。 ・地元愛も大事だが青梅の現代的な認識（人口、経済、機能等）も必要である。	学校関係者評価で一定の評価を得た。３年生では、３年間の青梅学の集大成として、現代的な青梅の良さと課題を掴ませ、理想とする未来の青梅を考え発信する取組を行っている。これからも青梅の過去・現在・未来に焦点を当て青梅の良さと課題を多面的に認識させるとともに、これらを通して日本人としてのアイデンティティ並びに人類の幸福の創造ができる資質・能力を育成する。
			⑩自治能力と責任を高める学校行事（運動会、合唱コンクール、宿泊行事、校外学習）、生徒会活動等を行う。	B 85.0	生徒の肯定的な評価が最も高い。（92.5％）教員、保護者も各項目の中で最も高くなっていて、本校の成果となっている。	現状を維持し、行事等を通じてＡｇｅｎｃｙを引き出して、自治能力と責任を高めていく。	B	・学校生活を通じで、生徒が一つの仕事に対して責任をもってやり遂げることは自信になり、充実感を得ることで生活のモチベーションにつながったりポジティブな気持ちになったりする。ぜひ、生徒の自治能力形成に向けたご指導をお願いする。 ・自治能力と責任感の醸成を Agency によって高めていくことが新町中学校の大きな事業であると捉える。これまでの経験と成果をもとに、大きく展開されることが求められます。第二段階に入っては、いままで以上の生徒に意思決定能力や他者との共同作業への対応に自発能動的な行動が求められる。今後の取り組みに大いに期待する。 ・継続お願いする。 **・学校行事は良き思い出であり、将来の糧となり大切である。ぜひ生徒の行動を評価して価値付けてほしい。**	自己評価も学校関係者評価からも高い評価を得た。これまでの生徒が企画・運営する生徒の取組を継続し、生徒の成就感を高めていく。
			⑪９年間を見通したキャリア教育、小中一貫教育の推進（職場体験、小６中学校体験授業を含む）	B 75.0	教員の肯定的な評価が低くなっているが（67.5％）、生徒の評価は高い結果となっている。（90.0％）教員は、生徒の自己教育力に課題を感じている。	キャリア教育は引き続き前倒しを継続する。また Agency の視点に立って生徒の自己教育力の向上を、キャリア教育を生かしながら進めていく必要がある。	B	・小中一貫教育は小学校の定着不足を中学校で補うことができたり、不登校の減少につながったりする可能性もある。 ・小中一貫教育校では、９年間子どもを見続けている先生がいるので子どもも安心できるメリットはあるが、小学校と中学校の節目がなくなり気持ちの切り替えや進学する充実感が子どもたちになくなるデメリットもある。 **・小中一貫教育の推進は、生徒の支持は 90%と高い。教員の意識としての必要性や必然性を再確認することが必要である。9年間を見通したキャリア教育の推進は、生徒の自己教育力の向上の具体的な方策を確立していく必要がある。** ・小中の児童生徒を含めた連携は必要であり、引き続きお願いする。	本校で小学６年生児童への授業体験、部活動説明会等があるが、中１ギャップに貢献しているとの評価を学校関係者からも得た。また、生徒の自己教育力は Agency の視点に立ち、キャリア教育を通して育成強化を図る。